

「アトリエ・コパン美術教育研究所」主宰新妻健悦氏における造形言語論とその実践に関する考察

A theory of the language of visual expression and observations on its implementation, by  
NIIZUMA Ken-etsu, director of the Atelier Copain Institute for Art Education Research

立原慶一

本稿では、宮城県石巻市にある民間美術教育施設「アトリエ・コパン」の児童が取り組んだ題材制作における、心の働きとして喜びや楽しみ、充実感などを見きわめる。いわゆる「熱中し高揚（ワクワク）感を覚えるような造形活動」が有する美術的特質と、その発揮する教育的意味、終局的には高い表現性がもたらす美的感動の内実を析出することにする。

その私的教育施設では、「紙のしわをなぞる」「にじみと遊ぶ」「ぬったクレヨンで釘でひっかく」など非知性的題材によって、非具象的非再現的造形言語と具体的説明的造形言語の融合された作品が、生み出されることがある。その場合、児童は題材実践で第一に、前者の造形活動に没頭し高揚感と期待感を味わい冒険心を働かせるだけに留まらず、第二に決して指導によるのではなく、非具象的非再現的形象の中から具体的説明的な形象を知らずとも見いだすことによって、彼らの内面に主題が意識される。さらに主題の造形表現化を主体的に試みることで、美術的理想を達成するには造形表現力が必要である、との実感を抱く。ひいてはそれが強制を伴うことなく、制作過程で育成されることになるのである。

昨今の美術教育界は、子どものポスト・モダンの傾向をやむを得ないものと見なし、彼らをして材料や場所の特徴など外在的なものから即物的に発想させることで、「つくりだす喜びを味わわせるようにする」という学習指導要領が求める必要条件を満たそうとしている。

しかし「アトリエ・コパン」ではそうした方向は採用されない。むしろ非具象的非再現的形象による造形活動でワクワク感を体験させようとするとともに、その知らずしらずの間に造形言語を身につけさせるなど、将来を見越しながら美術文化世界に対して、積極的に関与させることが念頭に置かれている。一般に小学校高学年は、創作意欲が減退することで美術表現における危機の時代といわれているが、その年齢でようやくこれまで蓄積されてきた三種類の造形言語が開花するのである。それは純粹造形的、材質感的、身体感覚的造形言語である。そうした点が、現在の学校教育と大きく異なるのである。

第三に、非知性的題材によって「こうあるべき」を睨んだ造形活動をあえて避けながらも逆説的に、それに条件づけられた性格の主題表現に主体的に携わる形が採られることで、情操が涵養されることになる。ここで情操とは「価値に憧れる力動の感情性」と言い換えてもよからう。

かくて私たちはその私塾的教育施設においてこそ、学校図画工作科教育の目標が知らずとも達成されている現実と直面する。そのことを鑑みてもそれは、「アトリエ・コパン」の指導課程と指導法の両面を参考にして、その活性化が図られなければならないだろう。学校美術教育再生の原理は、まさに同施設に求めることができるのではなからうか。